

1 | 変わりゆく海の世界

廃物だってマイホーム

釣り人は仕掛けやエサについて熟知しているが、肝心の魚が暮らす海底の環境にほとんど関心がないものと思われる。

それが証拠に、磯の釣り場近くの海底には驚くほど多数の空カンやペットボトルなどが散乱している。また、海沿いの道路わきに潜ってみると、自転車やミンなど生活廃棄物が沈んでいるのも珍しくない。

ところが、そんな廃物を魚が隠れ家や、卵を産んで棲み家として利用しているのを目にすることがある。空カンの中にしっかりと居を構える彼らの姿を見ていると、生きるためのしたたかな戦略に感心するが、やはり複雑な気持ちになる。

果たして彼らはこんな生き方に本当に満足しているのだろうか？



●空カンを棲み家にするニジギンボ（静岡・西伊豆）

●海底に散乱する空カンなどの廃棄物（静岡・東伊豆）

2 | 海中彩色劇場



●紫がかったさい冠を開くケヤリムシ、
近づくとパッと閉じてしまう（沖縄・与那国島）



●ハナビラクマノミの体色が、
だんだんと共生するイソギンチャクの紫色に近づく（沖縄・石垣島）

バイオレット

海の中は色彩に乏しいという先入観を持つ人が多いが、暖かい海でも、冷たい海でも、生き物はすべて特徴のある色と形を誇っている。これまでの進化の過程で、自身の彩色と模様をどのように生活環境に取り入れているのか、色別に分けたパターン配列してみた。しかし、中にはこのパターンにおさまりきれない迷彩色もあり、海はまさに色彩の魔術師が繰り広げる海中彩色劇場である。



●ウミトサカの表皮が光の反射で鮮明な紫色を表す（静岡・西伊豆）



●八放サンゴに寄生する
トラフケボリ、触手に隠れる
（静岡・東伊豆）



●棲管から触手を広げる
ヒメハナギンチャク（静岡・東伊豆）

3 | 食うか食われるか

●やっとなオコゼを捕らえたアナハゼ、7～8回は取り逃がしている
(京都・丹後半島)

礫地や藻場に生息するアナハゼは茶褐色の体がまだら模様になっており、周囲の環境の中で迷彩効果を発揮している。泳ぎ回って獲物を探すのではなく、エサとなる魚が何気なく近寄ってくるのを待ち伏せして襲いかかる戦略を用いる。距離をおいて観察していると、いつでも百発百中とはいかないようだ。捕食の瞬間を写すのに、ねばりにねばって、飲まず食わずで森羅万象の世界を覗き見て写せたカットでした。

●ハオコゼを捕食するミナミアカエソ
(沖縄・阿嘉島)



4 | 生きる知恵

共生の駆け引き

どんなクマノミも、稚魚の時を除けば必ずイソギンチャクと暮らしている。クマノミはイソギンチャクの毒のある触手で身を守られる。イソギンチャクはクマノミにエサを運んでもらったり、寄生虫や傷んだ触手部分を取り除いてもらう。相利共生として美しく語られているが、実際はそれぞれの個体が利己的に生きるための結果で、けっして自分を犠牲にして相手を助けているのではないようだ。ヒト社会も夫婦関係も、似たところがあるように思うのです。



●フトウデイイソギンチャクの触手の中に共生するマルガザミのカップル
(静岡・西伊豆)



●ドウアカクマノミの成魚と幼魚
(沖縄・座間味島)

●イボハタゴイソギンチャクに共生するトウアカクマノミ
(沖縄・座間味島)



●ニシキテッポウエビが掘った穴に居候し、共生しているダテハゼ
(静岡・西伊豆)

5 | 仲間を増やす

●激しく腕を絡み合わせて交接するオスとメス
(沖縄・石垣島)

コブシメ

胴長40～50センチに達するコブシメは、初夏になると恋の季節がやってくる。オスは鮮やかな色模様で体を飾り、メスの気を引くように腕を上げて求愛のポーズをとる。そしてメスに触れる位置まで近づくと、体色をネオンサインのように変えて交接を迫る。この間、別のオスが近づくと、瞬時に縞模様を強く表してライバルを威嚇する。雌雄が意気投合すると、両者は互いに腕をしっかり結び合い激しく交接する。オスは精子が詰まったカプセルをメスの体内に送り込む。その後、メスは2センチほどの受精卵をサンゴの間に産み付けていく。大役を果たしたメスは、やがて死んでしまう。ふ化は夜間、卵に丸い穴が開き、体の後端からずりりと幼生が抜け出して泳ぎ始める。



●メスを奪い合うオス同士の争い
(沖縄・石垣島)

●産卵するメス
(沖縄・石垣島)

●ふ化する幼生
(沖縄・石垣島)

●泳ぎ出した幼生
(沖縄・石垣島)

